



The University of Human Environments Academic Repository

| | |
|--------|--------------------------------|
| 学位の種類 | 博士(看護学) |
| 報告番号 | 甲第3号 |
| 学位記番号 | 看博第3号 |
| 氏名 | 中谷 こずえ |
| 授与年月日 | 平成30年9月15日 |
| 学位論文題目 | 認知症高齢者への選択的支援ケアモデルの開発 |
| 審査委員 | 主査: 臼井 キミカ 副査: 藤原 奈佳子、市川 誠一 |

論文内容の要旨

本研究は、最終目標として、「介護老人保健施設に入所する認知症高齢者の日常生活における選択的支援ケアモデルを開発し、その有効性の検証」をするために三段階に分けて研究に取り組んだ。

用語の定義は、選択的支援ケアとは、「施設利用高齢者が日常生活を送る上で、望むものを選ぶことをケア提供者が支援すること」とした。コンフォートとは、「Kolcaba(1995)のコンフォート理論を活用し、「利用者の身体的・サイコスピリットの・社会文化的・環境的コンフォートの各要素において緩和、安心、超越のニードを満たすことで苦痛の消失や肯定的な感情をもたらす状態」とした。なおユマニチュード(Humanitude)とは、「本田,イヴ,ロゼット(2014)が開発した、知覚、感情、言語による包括的コミュニケーションに基づいたケア技法『見つめること』『話しかけること』『触れること』『立つこと』の4つを柱としたコミュニケーション」であり、認知症ケアメソッドの1つとして用いた。

1. 通所介護における選択的支援ケア(研究1)

「自己選択・自己決定」をサービス理念としている通所介護事業所において、選択的支援ケアの意味を明らかにすることを目的に、利用者14名、ケア提供者14名にインタビュー調査を行った。研究対象者への質問内容は、利用者には「本事業所を選んだ理由」「デイサービスに通う楽しみ」「サービス理念に対する考え」、ケア提供者には「本事業所に就職した理由」「日常生活の中で様々な選択肢から選ぶことは利用者にとどのような効果・効能があると思うか」をインタビューガイドに沿って尋ねた。

データは、テキストマイニングを用いて単語頻度分析を行い、出現頻度4回以上の主要語を用いて、主成分分析を行い、さらにその結果を用いて、非階層クラスター分析を行った。利用者の主要語は26語、ケア提供者の主要語は42語抽出でき、各クラスターに構成概念を命名した。

クラスター分析の結果は、利用者のクラスターでは、【やりたいことが好きなようにできる】【自分がやりたくないことは嫌だと言う】【日々の生活が「楽しい」と感じるようになる】【後遺症を回復させる訓練も楽しみの場所となる】【仲間のことを思いながら一緒に過ごす】【バイキング昼食を「美味しい」と感じて食べる】の6クラスターが抽出できた。ケア提供者では、【利用者自身の能力を引き出す】【様々な活動プログラムがある】【目的や目標を持って過ごすことができる】【どのように過ごすのかを決めることは大切である】【やりたいようにすることが当たり前である】【1日の活動内容を考える】【自由な発想で社会と繋がる】【型にはめない過ごし方ができる】の8クラスターが抽出できた。これらの結果から、「選択的支援ケアは、身体的、サイコスピリットの、社会文化的、環境的な各要素をコンフォートな状態に変化させることができるケア」であることを導き出すことができた。さらには、選択的支援ケアは、利用者の自律を支えるケアであり、ケア提供者と利用者の双方にコンフォートによって「超越」に向かう可能性のあるケアであることが示唆された。

2. 介護老人保健施設利用者に対する日常生活の選択的支援ケアの実態(研究2)

ケア提供者が介護老人保健施設利用者に行う日常生活の選択的支援ケアの実施頻度と必要性の認識との関連を明らかにすることを目的に無作為に中部地方の施設を抽出し、697 施設の看護職・介護職総数 2788 名を対象に郵送法によるアンケート調査を実施した。質問内容は、起床から就寝までの身支度などの更衣、食事、入浴、余暇活動の 4 領域とケア提供者の職場環境の合計 5 領域で構成した項目である。主観的評価は、日常生活の選択的支援ケアの実施項目数は、実施頻度と必要性の認識各 25 項目に加えて、対象者の属性として職種、経験年数、「ケアを実施していない理由」に関する項目を設定した。

その結果、有効回答数は 480 件(回収率 17.2%)であった。ケア実施頻度の低い項目は、「入浴支援の際、当日の入浴担当職員を利用者が選ぶことを支援する」「入浴はどの時間帯にしたいかを決める支援」「食事は週に 1 度程度、利用者自身が選べるような選択食メニューの有無」であった。

ケア実施頻度 25 項目の Cronbach の信頼係数は $\alpha = 0.89$ であり、全項目を用いた因子分析の結果、「就寝、起床、身支度を確保するケア」、「食事の環境を確認するケア」、「余暇時間の活用方法を確認するケア」、「ケア提供者が相談する環境」、「食事や入浴における支援方法を確認するケア」、「入浴時の好みを確認するケア」の 6 因子に分類できた。ケアの必要性認識 25 項目の Cronbach の信頼係数は $\alpha = 0.82$ であり、前述と同様に因子分析した結果、『就寝、起床、身支度支援の認識』、『食事、入浴、余暇時間支援の認識』、『余暇活動や入浴の好み支援の認識』、『相談ができる環境の認識』の 4 因子に分類できた。また、職種別の必要性認識と実施頻度との間には看護職 ($r = 0.88$)、介護職 ($r = 0.84$) とそれぞれ正の相関を認めた ($p < 0.001$)。次に生活の質に最も影響を与えると仮定した「余暇時間の活用方法を確認するケア」を目的変数に設定し、選択的支援ケア実施頻度 5 項目と必要性認識 4 項目を用いて重回帰分析(強制投入法)を行った。その結果、「余暇時間の活用方法を確認するケア」は影響が大きい順に、「就寝、起床、身支度を確保するケア」「食事環境を確認するケア」「食事や入浴における支援方法を確認するケア」「入浴時の好みを確認するケア」であり、回帰式は有意であった ($p < 0.001$)。

選択的支援ケアの必要性認識では、すべての項目に必要性を感じていたが、「実施している」には至らなかった理由は、時間・人手不足の内容であった。次にテキストマイニングで「ない」の主要語に注目して分析した結果、前提単語と結論単語間には時間に関わる内容が 23 項目抽出され、時間が「ない」と結びついた主要語は「スケジュール」、「1 日」、「決める」、「利用者」、「決まる」、「食事」の 6 つであった。

日常生活における選択的支援ケアとは、日常生活のケアの中でどちらが良いのかをケアのなかで尋ねることであり、特別に時間を要するものではない。「時間がない」という視点から、ハイデガーの人間・存在・時間軸を用いて、選択的支援ケアの発展のプロセスには、人間の存在が不可欠であり、利用者とかケア提供者間の信頼関係が柱となり、創造性のあるケアに移行し、人のさらなる可能性を導きだすことができるものであると解釈できる。日常生活という限定された中でのケアではあるが、そのケアには人の可能性を無限に引き出すことができる力が秘められていると考える。そのた

め、選択的支援ケアは、利用者と信頼関係を築き上げる中で高齢者は勿論のこと、ケア提供者自身も専門職者としての価値を高めていくことができる可能性が考えられる。

3. 介護老人保健施設の認知症利用者への選択的支援ケアモデルの開発(研究3)

介護老人保健施設の認知症のある利用者への選択的支援ケアモデルを作成し、利用者21名とケア提供者26名に対して、シングルケース研究法のA-Bデザインに基づき準実験研究を行い、ケアモデルの有効性を検討した。介入期間は8週間であり、介入前の準備期からフォローアップ期までの全研究期間は15週間である。客観的評価では、各対象者に指尖脈波(最大リアプノフ指数・心拍数・自律神経バランス)[雄山, 2012]を合計5回測定した。主観的評価は、利用者では、Mini Mental State Examination(以下MMSE)(杉下, 逸見, 2010)、PGCモラールスケール(前田, 1979)、Geriatric Depression Scale(以下GDS)(渡辺, 今川, 2013)を、ケア提供者では、ケアの実施頻度、ケアの必要性認識、ikigai-9(今井, 長田, 西村, 2012)、Job Content Questionnaire(Karasek, 1985)を介入前後にWilcoxon符号付き順位検定で、その推移を比較した。

選択的支援ケアプログラムの内容は、研究2で実施頻度の低かった「入浴支援の際、当日の入浴担当職員を利用者が選ぶことを支援する」「入浴はどの時間帯にしたいかを定める支援」「更衣時に衣服の選択を促す声掛け」さらに、「おやつ時に提供のおやつと飲み物の選択」以上の合計4場面のケアを取り上げた。その際、ケア方法は「Humanitude:ユマニチュード」を参考にして具体的な手順を作成してケア提供者に提示し実践した。

ケアの有効性の検証は、主観的評価項目では、介入前後の対応のあるt検定を行い、客観的評価では、指尖脈波の最大リアプノフ指数・心拍数・自律神経バランスを用いて、反復測定によるWilcoxon符号付き順位検定を行った。また、ケアモデル実施後のケア提供者へのアンケート調査はケアの有効性に関する内容を抜き出しコルカバのコンフォート理論の4つの類型に分類し意味づけた。

その結果、利用者では、選択的支援ケア介入前後のWilcoxon符号付き順位検定で有意に上昇がみられたのはMMSEのみであった($p=0.042$)。MMSEの測定値が上昇していた利用者は8名であり、その内訳は軽度認知症2名、中等度認知症5名、重度認知症1名であった。PGCモラールスケール、GDS15も項目毎に差を確認したが、有意差はみられなかった。また、指尖脈波の最大リアプノフ指数では、認知症の重症度別において軽度認知症と中等度認知症者のみを抽出してWilcoxon検定を用いた結果、有意に上昇していた。

ケア提供者では、介入の前後の対応のあるWilcoxon符号付き順位検定(関連2群の差の検定)では、職業性ストレスの下位項目である身体状態($p=0.000$)・仕事の満足度($p=0.018$)、生きがい意識($p=0.014$)、ケア実施頻度($p=0.001$)が有意に上昇した。また、指尖脈波の最大リアプノフ指数はFriedman検定においても、介入により有意に上昇した。しかし、心拍数や自律神経バランスではいずれも有意差は認めなかった。さらに、ケア提供者の質問紙調査とインタビュー調査の結果は、コルカバのコンフォート理論の身体的・環境的・社会文化的・サイコスピリットの4つのコンフォートにまとめあげることができた。

選択的支援ケアは、ケア提供者では、ケアモデル介入によって仕事の満足度を高めることができた。このことは、利用者の改善を直接観察でき、その成果をケア提供者自身がサイコスピリットコンフォートとして実感できたからであり、さらに生きがい意識上昇にも繋がったと考えられた。人は生涯を通じて自己実現に向かう存在であり、それは健常者であっても、認知症があっても変わりがないと考えられる。今回の研究の結果、選択的支援ケアは、利用者とケア提供者の双方が自己実現に向かうことに繋がる「看護・介護支援」であることが示唆された。

選択的支援ケアモデルは、利用者の認知機能の維持・増進、ケア提供者にとっては、職業性の身体的ストレスを改善し、生きがい感にも繋がるケアであり、有効であった。

論文審査の結果の要旨

この論文は「認知症高齢への選択的支援ケア」の必要性の認識とケアの実施状況について、認知症高齢者とケア提供者の双方からデータを収集し、質的、並びに量的に分析し、その実態と課題を明らかにしている。さらに、近年、ケア理念として注目されている「ユマニチュード」を取り入れた選択的支援ケアモデルを独自に開発し、研究1から研究3までの三段階の介入研究を経て、そのケアモデルの有効性を明らかにしており、各段階の研究目的、分析、結果が関連して進められ、得られた知見は認知症高齢者のケアのあり方について示唆するものであり、博士論文のレベルに達していると評価した。なお、研究成果には新規性があり、看護学の発展に貢献しうる価値の高い論文である。

この研究に取り組むに当たっては、認知症高齢者の意思決定支援の枠組みや標準的な支援プロセス等が存在しない状況の中で、意欲的に研究に取り組み、その分析は緻密で、理論展開も明快であり、看護学研究者としての申請者の高い能力を有していると評価できる。

また、認知症高齢者の選択的支援ケアモデルを用いての分析は、斬新であり、オリジナリティの高い研究内容であるばかりか、認知症高齢者に対する実践的なケアモデルは、認知症高齢者が質の高い生活を送る上での基本的な考え方を簡潔・明瞭に提示しており、このことは看護・介護ケアの分野のみならず、一般社会の全ての人々に希望をもたらすことにつながる価値ある研究である。

以上、要約すると、本論文は、厳密で緻密な研究計画と分析に則って実施され、認知症の高齢者には可能性は皆無に等しいと誤解されていた状況に警鐘を鳴らした優れた論文であり、論文で得られた研究成果は、看護学研究者、看護実践者として高い能力をもつことを十分に示すものである。

ここに、審査および面接の結果を踏まえて、審査委員一同は中谷こずえ氏が人間環境大学博士(看護学)の学位を授与されるに十分な資格を有していると判断するものである。

平成30年7月7日

| | | | | |
|--------|----|----|----|-----|
| 論文審査委員 | 主査 | 教授 | 臼井 | キミカ |
| | 副査 | 教授 | 藤原 | 奈佳子 |
| | 副査 | 教授 | 市川 | 誠一 |